

## 令和 4 年度大（応）神塚古墳（寒川町No.8 遺跡）保存目的のための調査概要

遺跡の名称	大（応）神塚（寒川町 No. 8 遺跡）
調査実施日	令和 5 年 2 月 21 日（火）～3 月 29 日（水）
所在地	高座郡寒川町岡田 2380
調査機関	寒川町教育委員会 教育政策課
調査担当	小林秀満
調査面積	9.4 m <sup>2</sup> （トレンチ 1 カ所）
調査原因	保存目的
発見遺構	弥生時代：住居？ 古墳時代：古墳東側後円部から前方部にかけての墳丘裾（くびれ部分） 近代：溝状遺構
出土遺物	弥生土器片、土師器、常滑、銅銭

## 調査成果

大（応）神塚古墳は、寒川町指定重要文化財第 19 号であり、町内唯一の墳丘を保った古墳である。明治 41 年（1908）、東京帝国大学の坪井正五郎氏を中心とした発掘調査が実施された他は、昭和 57 年に神奈川県教育委員会において測量調査を実施したのみである。これらの調査から、前方後円墳であり、5 世紀ごろの築造とされている。

しかし、明治時代の調査であり、遺物の出土状況、古墳の範囲や周溝の有無、築造の年代や方法など不明な点が多いのが現状である。

今回、古墳の形態や、範囲、築造年代などの古墳の性格を把握し、今後の保存方法検討のための基礎資料とするための調査を実施した。

本年度は、古墳東側の後円部から前方部にかけての墳丘裾及、くびれ部分の確認を目的として実施した。

令和元年度に実施した古墳東側後円部南東部のトレンチで確認された後円部裾と、令和 2 年度に実施した古墳東側前方部の 3 トレンチで確認された前方部裾とを結ぶ位置にトレンチを設定した。

当初は 2×2m で設定したが、周溝相当の溝の確認のため東側、また墳丘部確認のため西側にもトレンチを拡張した。調査区北側については調査期間及び安全面を考慮し、中世相当層部分までの調査とした。

表土除去後、宝永スコリアを主体とする層、宝永スコリアまじりの層、ローム層主体とする近世層が確認された。墳丘直下と思われる箇所には中近世の溝状遺構が確認された。これは他の同箇所でも確認される。その後常滑などが確認される中世層を除去後、徐々に黒色の発泡スコリアを含む層が確認された。黒色発泡スコリア主体層下には、黒色土と発泡スコリア混じりの層が確認され、最終的にローム層まで掘込が確認された。墳丘側は墳丘立上りが確認された。墳丘裾は北東から南西へ向け屈曲し、南西壁際で屈曲の方向が若干変化していた。この部分がくびれ部分となる可能性

が高いと思われる。しかし、墳丘自体はトレンチ内では屈曲方向は変わる感じが見られず南西方向へ向かい調査区外となった。

墳丘はローム漸位層から富士黒色土層を削って作成された状況が確認された。一部令和元年度でも確認された弥生時代の住居と思われる遺構を削りこんで墳丘裾を形成した状況が確認された。

墳丘裾から外側にかけては若干平らな面が続き、その後外側に落ち込むような状況がみられた。遺物は弥生土器片を中心に、土師器等が確認された。

#### まとめ

今回の調査でおおよそくびれ部分が確認できたと思われ、当初の目的は達成できた。墳丘裾の状況や、周溝相当の溝の覆土の状況はおおよそ他の調査箇所と同様であった。

今回の調査により、当初予想の前方後円墳の形態に近いものとなると思われる。当初予想の形態は前期古墳を基に想定したものであるため、同時期である可能性も高くなったのではないだろうか。

また遺物は今回も弥生土器、土師器の土器片が少量確認できたが、年代を推定できるような遺物は確認できなかった。



